

# 江蘇通州方言における入声舒声化 —金沙と二甲の比較分析—

大西 博子

## 要旨

通州位于江苏省南通市通州区，其方言分布于北部吴语和江淮官话交界地带，单字调中存在入声舒化现象。本文对金沙和二甲两地的调查结果进行比较，总结了通州方言入声舒化的动态及地理差异，并通过与周边方言的比较，考察了通州方言入声舒化的发生原理。

## はじめに

中国語の諸方言は、中国の北部全体および西南部にかけての広大な地域に分布する北方方言と長江以南の東南部に分布する南方方言の二群に大別され、その差異はきわめて著しい。よって、この二群の接する地域においては、言語接触による興味深い現象を観察することができる。本稿は、南方方言の一種である呉語と北方方言の江淮官話とが相接する長江河口北岸に位置する南通市通州区における方言を対象とし、その地で観察される入声舒声化と呼ばれる声調変化に着目し、言語接触によって中国語の声調が如何に変化していくかを追究するものである。特に入声と呼ばれる声調は、現代中国語（普通話）ではすでに失われているため、その入声に変化が生じ始めている通州方言の実態は、中国北方方言における入声消滅の原理を解明する上で、有力な手がかりを与えてくれると考えられる。

筆者は、通州の金沙と二甲の2地点で、過去3回方言調査を行ってきた（2016年8月、2017年3月、2018年8月）。両地点は、呉語と官話が混交する中間的な位置にあり、入声舒声化も顕著に現れているが、その実態には地域差が見られる。本稿では、金沙と二甲における方言調査の分析結果を対比させながら、通州方言における入声舒声化の地域差を明らかにし、さらに他の方言地域との比較を通して、入声舒声化の発生原理についても追究したい。

## 1. 入声舒声化の定義

本題に入る前に、入声舒声化とは何か、その定義について説明しておく。

### 1.1 入声とは

中国語は、声調言語である。声調は、中古音の四声（平声・上声・去声・入声）を陰陽二類に分ける四声八調（陰平・陽平・陰上・陽上・陰去・陽去・陰入・陽入）で分類され

る。四声のうち、入声を除いた平声・上声・去声を舒声と呼び、それらの声調は、まとめて舒声調と言う。入声は、短く詰まって発音される音節を調類としたもの（短促調）を指し、陰陽に分かれた陰入と陽入をまとめて入声調と呼ぶ。入声と言えば、促音で発音される音節のみを指す場合が多いが、厳密に言えば、その声調（調類）も含まれる。

## 1.2 入声舒声化の定義

現代中国語には、陰平、陽平、上声、去声の4つの声調があるのみで、入声は存在しない。つまり、入声音節は消滅し、入声調は舒声調と合流していると考えられている。中国語の諸方言では、入声音節は、南方方言に残存しているが、北方方言においては、山西省を中心に分布する晋語と江蘇省北部を中心に分布する江淮官話を除いて、すでに失われている（『漢語方言地図集（語音巻）』2008）。しかし、入声音節が失われている方言地域の中には、入声調が依然として存在する方言も分布しているため<sup>1</sup>、現代中国語の入声は、先に入声音節が変化し、その後、入声調が舒声調へ合流するというプロセスを経て消滅したと考えられる。本稿では、こうした入声消滅までの変遷過程を入声舒声化と捉える。つまり、入声音節の弱化から、舒声調合流までの一連の声調変化が考察対象であり、個別の漢字音における入声舒声化を扱うものではない。

## 2. 調査地点の方言概要

### 2.1 通州方言

通州は、江蘇省南通市における最大の市街区である。総面積約 1526km<sup>2</sup>、常住人口 127 万人を有する（『通州年鑑 2017』）。東は黄海、西は長江に面し、長江対岸には蘇州と上海が位置する。通州方言と言えば、狭義の解釈では、通州区の中心街（金沙）に分布する方言のみを指すが、本稿では、通州区全域に分布する方言も含む。

南通市の方言はさわめて複雑で、音韻的特徴から4つの方言地区（如海、南通、通東、海啓）に区分される（鮑明煒、王均 2002）。そのうち、如海地区と南通地区の方言は、江淮官話の泰如片と呼ばれる方言グループに帰属し、通東地区と海啓地区の方言は、呉語の太湖片と呼ばれる方言グループに帰属する。通州は、この4つの方言地区すべてにまたがる地域で、南通市の中で最も複雑な言語環境にある。

### 2.2 金沙と二甲

本稿が対象とするのは、金沙と二甲という町の方言である。両地は、車で30分ほどの移動距離（約17km）にあり、ともに通東地区に位置するが、地区内部にも方言差があり、その違いから「金沙片」と「二甲片」とに二分される（鮑明煒、王均 2002）。金沙（旧金

沙鎮)は、その前者の代表地点で、通州区の中心街にあたり、面積約102km<sup>2</sup>、人口15万人を有する(『通州年鑑2017』)<sup>2</sup>。二甲(二甲鎮)は、「四甲片」に属する地点で、通州区の東南に位置し、面積約66km<sup>2</sup>、人口7万人を有する(『通州年鑑2017』)。

金沙と二甲の方言は、地域差はあるものの、どちらも地元の人たちから「江北話(江北言葉)」と呼ばれている。二甲から南へ10kmほど進むと海啓地区に着くが、その地の方言は、長江と黄海沿岸地域に分布することから、「沙地話(砂地言葉)」と呼ばれて区別される。「江北話」と「沙地話」はどちらも呉語に帰属するが、前者は「毗陵小片」、後者は「上海小片」と呼ばれる下位方言グループに分類される(『中国言語地図集(第二版)』2012)。

通東地区の方言は、その帰属をめぐる、今なお激しい論争が繰り返されている。多くの学者(許宝華・湯珍珠・游汝傑1984、顔逸明・敖小平1984、傅国通等1986、徐鉄生2003、陶国良2003、汪平2005、2010、周戩剣2009)は呉語だと主張しているが、呉語とは認めがたいと主張する学者もいる(顧黔等2006)。また下位方言グループにおける帰属をめぐる対立があり、多くの学者が「毗陵小片」に分類すべきだと主張しているが、「金呂小片」という新たな方言グループを設立し、独立すべきだと主張する学者もいる(徐鉄生2003、陶国良2003)。本稿では、『中国言語地図集(第二版)』の記述に基づき、金沙と二甲の方言は呉語に帰属すると考えるが、隣接する呉語と比べて、官話の要素をより多く含んだ過渡的な呉語であると位置付ける。

### 3. 調査対象と分析方法

#### 3.1 発話者

本稿の分析は、14名の発話者による録音データに基づく。金沙では6名、二甲では8名を選抜した(表1<sup>3</sup>)。発話者は、金沙1のように番号を用いて年齢順に示す。表1の年齢は、調査時における年齢である。調査は、二甲では2017年3月3日から5日の3日間、金沙では2018年8月14日と15日の2日間実施し、主に発話者の自宅で録音を行なった。

表1. 発話者リスト

番号	年齢	性別	学歴	職業	父親の出身地	母親の出身地	他地域での生活歴
金沙1	65	男	中卒	退職	金沙	金沙	定年退職後南京で4年
金沙2	64	女	高卒	退職	山東	石港	なし
金沙3	59	男	高卒	会社員	山東	石港	なし

金沙 4	58	女	中卒	農業	金沙	金沙	なし
金沙 5	40	女	中卒	主婦	金沙	金沙	なし
金沙 6	37	男	大卒	教師	金沙	金沙	高校卒業後山西大同で9年
二甲 1	77	男	高卒	退職	二甲	二甲	なし
二甲 2	73	女	中卒	退職	海安	二甲	なし
二甲 3	73	女	小卒	退職	二甲	上海	なし
二甲 4	70	男	中卒	退職	二甲	二甲	なし
二甲 5	52	男	中卒	自営業	二甲	二甲	なし
二甲 6	51	女	中卒	主婦	余西	二甲	なし
二甲 7	28	男	院卒	大学院	二甲	二甲	高校卒業後南京で3年半
二甲 8	20	女	短大卒	店員	二甲	二甲	高校卒業後蘇州で2カ月

### 3.2 調査語

本稿では、入声舒声化が顕著に現れる単音節語を調査対象とする。録音データ（調査語）は、表2のとおりである。調査語の選定条件は、①開口系韻母、②無気音、③p系とt系の声母から2ペア（2語）、④韻母は同音の4条件からなる。入声調は、上記すべての条件に当てはまる語がなく、p系だけの声母から2ペアを選定した。声調は、T1のように記号を用いて示す。

表 2. 調査語

T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
包 刀	跑 桃	宝 島	抱 稻	报 到	暴 盜	八 百	拔 白

### 3.3 分析方法

調査語は、一語につき5回の発話データを録音した。録音には、Marantz社製録音機PMD561（サンプル周波数44.1KHz、量子化ビット16bit）、マイクはAKG社製C520を使用した。すべての録音音声はPraat（Boersma and Weenink1992-2018）を用いて、母音の声帯振動が安定している部分を目視で設定した上で、その設定区間の10%から100%時点の基本周波数（F0）をProsodyPro.praatscript（Xu2005-2018）で10%ごとに計測した。測定後のデータ処理方法については、拙稿（大西2018）を参照されたい。

金沙と二甲の方言は、ともに7声調であり、T4はT6と合流している。よって、本稿が対象とする声調は、T4を除いたT1、T2、T3、T5、T6、T7、T8である。

#### 4. 持続時間の比較

入声は短促調であるため、音節の長さは必然的に舒声より短くなる。本章では、F0の計測から得られた持続時間（duration）の測定値を入声調と舒声調とで比較しながら、入声音節の長音化の動きを分析する。

##### 4.1 単字調の平均持続時間

表3は、発話者全員の各声調における平均持続時間及びその平均値を示したものである。全体的に二甲の方が金沙より持続時間が長く、入声ではその傾向がより顕著に現れている。金沙の入声は70ms～287ms、二甲の入声は116ms～297msの範囲内に現れている。

表3. 単字調の平均持続時間（単位：ms）

発話者	T1	T2	T3	T5	T6	T7	T8	平均値
金沙1	243	244	204	117	111	70	139	161
金沙2	214	273	192	108	156	68	182	171
金沙3	264	221	256	208	211	96	137	199
金沙4	311	330	251	214	283	153	287	261
金沙5	214	256	204	106	97	76	157	159
金沙6	344	441	371	246	264	206	207	297
二甲1	332	392	271	374	311	277	215	310
二甲2	309	398	304	389	341	293	210	321
二甲3	290	398	229	373	274	259	210	290
二甲4	247	324	204	317	280	206	179	251
二甲5	165	203	163	218	173	148	116	169
二甲6	236	309	196	286	225	235	194	240
二甲7	270	367	201	337	268	297	188	275
二甲8	288	281	211	284	190	287	229	253

##### 4.2 持続時間の地域差

表3の結果を統合し、絶対値による平均値とその平均値を標準化した相対値を表4に示す。相対値とは、絶対値の平均値を1と換算した場合の比率を求めた数値で、持続時間の比較分析に適した指標として使われる。

表 4. 絶対値平均と相対値平均 (単位 : ms)

	地点	T1	T2	T3	T5	T6	T7	T8	平均値
絶対値 平均	金沙	265	294	246	167	187	112	185	208
	二甲	267	334	222	322	258	250	193	264
相対値 平均	金沙	1.27	1.42	1.18	0.80	0.90	0.54	0.89	1.00
	二甲	1.01	1.27	0.84	1.22	0.98	0.95	0.73	1.00

入声音節の長音化は、平均持続時間が舒声調平均値の三分の一（33%）を超えているかを一つの目安とする（朱曉農等 2008）。入声調で持続時間が最も短い金沙の T7 は、その平均値が 112ms であるが（表 4）、その値は、舒声調平均（232ms）の 33%（77ms）を優に超えている。従って、両地点における入声は、すでに長音化が始まっていると分析できる。

表 4 の結果から、声調間の持続時間の差を長い調類から順に示すと、以下の序列になる。

金沙 T2 > T1 > T3 > T6 > **T8** > T5 > **T7**

二甲 T2 > T5 > T1 > T6 > **T7** > T3 > **T8**

ここで、入声調（T7 と T8）の序列に着目すると、両地点ともに 5 番目と最後尾に現れているが、それぞれの位置に現れる声調は対称的である。金沙では 5 番目に T8、最後尾に T7 が現れるのに対し、二甲では 5 番目に T7、最後尾に T8 が現れている。つまり、入声音節の長音化は、金沙では T8、二甲では T7 から加速し始めている。

### 4.3 長音化の動き

長音化の動きには個人差も見られる。表 5 は、単字調における持続時間の序列を発話者ごとに示したものだが、入声調が並行して最後尾に並ぶのは 4 名のみで、残りの 10 名は、入声調の序列に個人差がある。金沙では T7 が最後尾に位置し、T8 は 6 番目から 3 番目の位置に現れているが、二甲では T8 が最後尾に位置し、T7 は 6 番目から 2 番目の位置に現れている。特に若年層においては長音化の動きが活発で、二甲 8 では T8 も長音化が加速している。

表 5. 単字調における持続時間の序列

	最長	>	>	>	>	>	最短
金沙 1	T2	T1	T3	<b>T8</b>	T5	T6	<b>T7</b>
金沙 2	T2	T1	T3	<b>T8</b>	T6	T5	<b>T7</b>

金沙 3	T1	T3	T2	T6	T5	T8	T7
金沙 4	T2	T1	T8	T6	T3	T5	T7
金沙 5	T2	T1	T3	T8	T5	T6	T7
金沙 6	T2	T3	T1	T6	T5	T8	T7
二甲 1	T2	T5	T1	T6	T7	T3	T8
二甲 2	T2	T5	T6	T1	T3	T7	T8
二甲 3	T2	T5	T1	T6	T7	T3	T8
二甲 4	T2	T5	T6	T1	T7	T3	T8
二甲 5	T5	T2	T6	T1	T3	T7	T8
二甲 6	T2	T5	T1	T7	T6	T3	T8
二甲 7	T2	T5	T7	T1	T6	T3	T8
二甲 8	T1	T7	T5	T2	T8	T3	T6

## 5. ピッチ曲線の比較

次に、ピッチ曲線を比較しながら、入声調の調値の動きを分析する。

### 5.1 単字調の調値

表 6 は、筆者が算出した金沙と二甲の調値である。地域差は陰調に現れ、陽調はほぼ一致している。よって、入声においても T7 の調値は大きく異なるが、T8 の調値は一致している。また T7 の調値は、両地点ともに T5 と同形で、時間差のみが生じている。

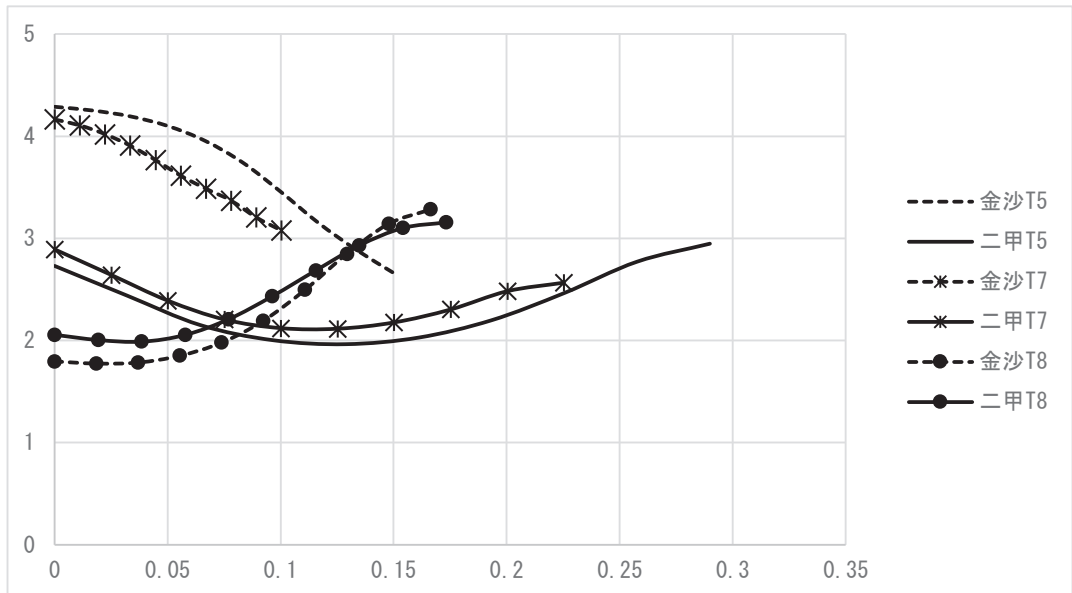
表 6. 単字調の調値

	T1	T2	T3	T5	T6	T7	T8
金沙	34	213	44	53	31	<u>53</u>	<u>24</u>
二甲	44	13	52	323	21	<u>323</u>	<u>24</u>

### 5.2 ピッチ曲線の地域差

図 1 は、T5、T7、T8 のピッチ曲線図である。点線は金沙、実線は二甲のピッチ曲線を示す。横軸は実時間（単位 s）、縦軸は T 値（調値）である。T7 の調値は、表 6 では両地点ともに T5 と同形で示しているが、ピッチ曲線の比較から、金沙よりも二甲の T7 の方が、T5 へより接近していると分析できる。一方、T8 の調値は、表 6 では両地点ともに [24] で示しているが、ピッチの上昇は、金沙よりも二甲の方が緩やかであり、実際の調値は [23] に近いことがわかる。

図 1. T5、T7、T8 のピッチ曲線図 (T 値)



### 5.3 調値接近の動き

ピッチ曲線の描写には個人差も見られる。本節では、紙幅の関係上、老年層（金沙1、二甲1）と若年層（金沙5、二甲8）のみ対比させながら、入声調（点線）の舒声調（実線）への調値接近の動きを分析する（図2）<sup>4</sup>。

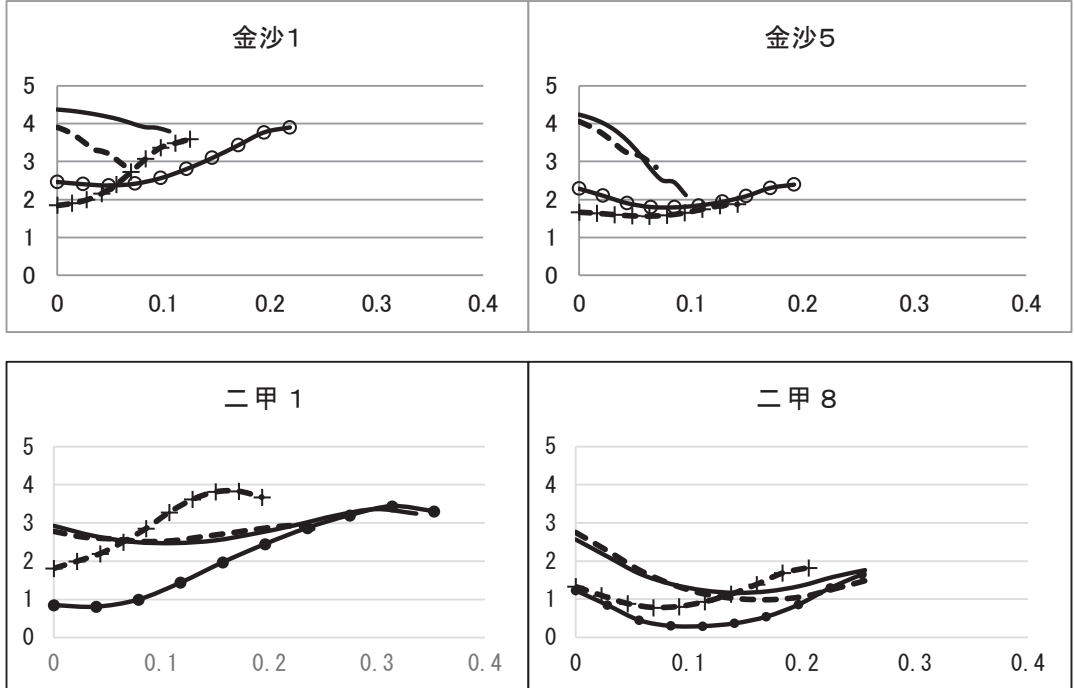
T7 (---) と T5 (—) のピッチ曲線は、金沙1ではその差は大きく現れているが、金沙5では縮まっている。つまり、調値接近の動きは、若年層において加速している。金沙1と金沙5のグラフでは、一見 T5 が T7 へ接近しているかのように見えるが、先行研究において<sup>5</sup>、T5 の調値は [52] や [53] で記述されるのに対し、T7 は [32][42][43] など、T5 よりも低い調値で記述されることから、T7 が T5 へ接近していくと考えるのが妥当であろう。一方、二甲の場合、老年層において T7 と T5 の差はすでに縮まっていることから、調値接近の動きは、金沙よりもさらに加速していると考えられる。両者の違いは、横軸（実時間）に現れているだけで、二甲1ではその差は 87ms であるのに対し、二甲8ではわずか 3ms であり、調類合流の兆しが観察できる。

T8 (++) のピッチ曲線は、上昇型であることから（図1）、単字調の中で同じく上昇型である平声への調値接近が考えられる。よって、金沙では T1 (○○)、二甲では T2 (●●) のピッチ曲線と対比させて、T8 の動きを分析する。T8 の調値は、両地点ともに [24] で表記しているが、その調形が明確に現れるのは、老年層のグラフで、若年層のグラフでは、T8 は緩やかなカーブに描かれ、平声との差も縮まって見える。調値は、金沙5では



[22]、二甲 8 では [12] と示せる。二甲 8 では、調値の起点は T2 と同じで、時間差も二甲 1 に比べてかなり縮まっている。

図 2. ピッチ曲線の世代差



## 6. 声門閉鎖の比較

中古音の入声は、音節末に [-p, -t, -k] を伴うことで知られるが、呉語では、音節末に声門閉鎖音 (glottal stop) を伴う。例えば「八」の音価は、声門閉鎖音 [-ʔ] を伴う形で [paʔ] と表記される。厳密に言えば、声門閉鎖音には、きしり声 (creaky voice) などの変種も含まれるが (朱曉農 2010)、本稿では、Praat のサウンドエディター (Sound Editor) に出力される波形とピッチ曲線の描写による分析方法 (宋益丹 2009、袁丹 2013) で声門閉鎖の有無を確かめる。例えば、波形図において末端部に峰状の突起がある場合 (図 3)、本稿では、声門閉鎖が「ある」と見なし、突起が確認されない場合 (図 4) は「ない」と見なす。ピッチ曲線が急激に上昇している場合 (図 5) も声門閉鎖が「ある」と見なす。

図3. 金沙5「八1」

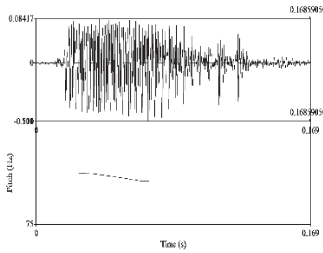


図4. 金沙5「抜1」

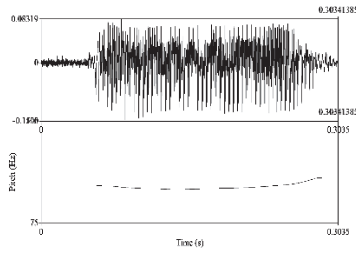
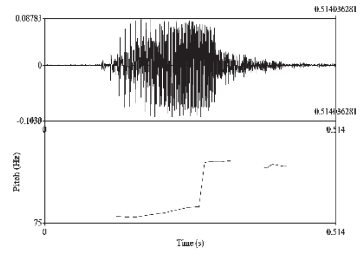


図5. 金沙1「抜1」



### 6.1 声門閉鎖の有無

表7は、各発話者における声門閉鎖の保有状況である。声門閉鎖が「無」のデータは、若年層に多く現れる傾向があるが、老年層においても「無」のデータは点在するので、表7から声門閉鎖の漸進的な変化を読み取るのは難しい。

表7. 声門閉鎖の有無

発話者	T7			T8		
	有	無	データ数	有	無	データ数
金沙1	10	0	10	8	2	10
金沙2	9	0	9	8	2	10
金沙3	10	0	10	8	0	8
金沙4	10	0	10	10	0	10
金沙5	8	1	9	0	10	10
金沙6	10	0	10	6	4	10
二甲1	6	4	10	10	0	10
二甲2	8	2	10	10	0	10
二甲3	10	0	10	10	0	10
二甲4	10	0	10	10	0	10
二甲5	10	0	10	10	0	10
二甲6	4	6	10	8	2	10
二甲7	4	5	9	8	2	10
二甲8	4	6	10	10	0	10

## 6.2 声門閉鎖の地域差

表 8 に、声門閉鎖の保有状況を地点別に示す。表内の数字は、該当するデータ数を表す。声門閉鎖の保有率に着目すると、90%以上を超える声調は、金沙では T7 であるが、二甲では T8 と対称的である。また金沙の T8 と二甲の T7 の保有率は、ともに 70% 前後である。この結果は、持続時間の地域差と一致する (4.2)。持続時間の序列で、最短の位置に現れるのは、金沙が T7、二甲は T8 で、金沙の T8 と二甲の T7 は、ともに 5 番目の位置に現れている。偶然かもしれないが、声門閉鎖の保有率は、持続時間の序列と対応している。

表 8. 声門閉鎖の保有状況

地点	T7		T8	
	有	無	有	無
金沙	57 (98.3%)	1 (1.7%)	40 (69.0%)	18 (31.0%)
二甲	56 (70.9%)	23 (29.1%)	76 (95.0%)	4 (5.0%)

## 6.3 声門閉鎖の弱化

声門閉鎖の保有率の低下を弱化と捉えるのなら、両地点において、声門閉鎖の弱化はすでに始まっていると言える。先行研究では、入声の舒声化は、声門閉鎖の弱化に始まり、入声音節の長音化と調値接近という過程を経て、調類合流に至ると考えられてきた (朱曉農等 2008、宋益丹 2009、徐越・朱曉農 2011)。しかし、その一方で、声門閉鎖が弱化しているのに長音化していないケース (朱曉農・焦磊 2011) や、声門閉鎖が弱化していないのに長音化しているケース (袁丹 2013) も報告され、声門閉鎖の弱化を舒声化の指標とすることに疑問も投げかけられてきた。金沙の発話データの中にも、声門閉鎖があるのに長音化しているケースが見られる (大西近刊) ことから、本稿では、声門閉鎖の弱化は、入声舒声化の目安にならないことを指摘しておく。声門閉鎖は、入声の発生時に起こる付随的な現象であり、その有無に地域差や個人差は認められるものの、その差でもって、入声舒声化の進度は測れないと考える。事実、表 7 から声門閉鎖の漸進的な変化を読み取ることはできなかった。

入声音節の特徴的な要素は、その「短さ」にある。入声に対する弁別調査において、被験者は入声音節の長短によって、入声であるか否かを判断するという結果が報告されている (袁丹 2018、唐志強 2018)。つまり、入声の必需的な要素は「短」であり、「促」(詰まる)ではない。仮に声門閉鎖を伴わなくても、持続時間が短いだけで、入声だと認められ

ると言える。よって、本稿では、入声舒声化を促す要素として、音節の長音化と調値接近が直接関わっていること、そして声門閉鎖の弱化は、あくまで舒声化に伴う現象と考えることにする。

## 7. 通州方言における入声舒声化

以上、金沙と二甲の両地点における入声調の動きを分析してきた。本章では、この結果を踏まえて、通州方言における入声の舒声化進行のプロセスと段階を考察する。

### 7.1 進行プロセス

通州方言における入声舒声化は、以下のプロセスで進行する（大西 2018）：入声音節の長音化（Ⅰ）→ 舒声調値への接近（Ⅱ）→ 持続時間の接近（Ⅲ）→ 調類合流（Ⅳ）。

金沙と二甲の入声音節は、すでに長音化が始まっており、調値（ピッチ曲線）においても入声調と舒声調とが互いに接近しあう様子が観察できたことから、入声舒声化はⅠからⅡへの移行段階にあると分析できる。ただ入声調が依然としてその調類を維持しているのは、音節の持続時間において、接近しあう舒声調との間に、まだ時間差が生じているからであり、もしその差が縮まれば、調類合流へと一気に加速する。今回、ピッチ曲線の世代差調査（図 2）から、進行プロセスのⅡからⅢ、さらにはⅢからⅣへと移行する動きも確認できた。但し、こうした動きは T7 に限られ、T8 にはまだ見られない。

### 7.2 進行段階

入声舒声化の進行段階には、地域差や世代差が見られる。表 9 は金沙と二甲の入声舒声化の進行段階（進度）を進行プロセスの記号（ⅠからⅣ）を用いて示したものである。表内の数字は、図 2 のピッチ曲線から算出した調値である。

金沙の進度は、老年層（金沙 1）では、調値接近の動きがまだ見られないことからⅠの段階、若年層（金沙 5）では、調値接近の動きはあるが、調値はまだ完全に一致していないことからⅡの段階である。二甲の場合、T7 と T8 とで進度が異なる。T7 は、老年層（二甲 1）では、調値は T5 と同形で時間差のみ生じていることからⅢの段階、若年層（二甲 8）では、調値も時間も T5 とかなり接近していることからⅣの段階である。T8 は、老年層では、依然として舒声と異なる調値にあることからⅠの段階、若年層では、表 9 には T2 と同じ調値を記しているが、ピッチ曲線（図 2）では依然として差が見られることからⅡの段階である。

表 9. 入声舒声化の進行段階

金沙	T5	T7	進度	T1	T8	進度	二甲	T5	T7	進度	T2	T8	進度
老年	54	<u>43</u>	I	34	<u>24</u>	I	老年	323	<u>323</u>	III	13	<u>24</u>	I
若年	42	<u>43</u>	II	23	<u>22</u>	II	若年	312	312	IV	12	<u>12</u>	II

## 8. 江淮官話と呉語における入声舒声化

入声舒声化は、金沙と二甲に限って発生している現象ではない。呉語や江淮官話にも広く見られる現象である。本章では、通州に隣接する方言地域の入声調と比較しながら、通州方言でなぜ入声舒声化が生じ始めているのか、その原理を追究する。

### 8.1 長音化の動き

表 10 は、通州近隣の江淮官話泰如片と呉語太湖片における入声の持続時間と調値である<sup>6</sup>。持続時間は、絶対値（単位 ms）と相対値の順で示す。序列は、単字調での順位対声調数で示す。例えば 7/7 は、7 声調の中で 7 番目（最短）という意味である。

まず序列に着目すると、入声調が最短の位置に並ばないのは、東台（T8）、如皋（T7）、金沙（T8）、二甲（T7）の 4 地点のみである。これらの地点では、入声音節の長音化が始まっていると分析できる。しかし、北部呉語（太湖片）では、入声調は依然として、最短の位置に並ぶことから、入声舒声化はまだ始まっていないと言える。このことから、金沙と二甲の入声舒声化は、官話方言の影響を受けて発生している現象だと考えられる。

入声舒声化は、陰入（T7）と陽入（T8）のどちらか片方から始まる。一般的に、南方方言では、陽入が陰入より先に舒声化が始まるとされている（曹志耘 2002、徐越・朱曉農 2011）。確かに、表 10 に示した呉語の各地点では、「最短」の位置に留まっているのはすべて T7 である。しかし、江淮官話では、T8 が最短の位置に来ている地点（泰州、姜堰、如皋）もあることから、必ずしも陽入から長音化が始まるとは言えない。二甲の T8 が依然として最短の位置に留まっているのは、江淮官話との共通点であり、官話方言の特徴であるとも言える。

表 10. 江淮官話泰如片と呉語太湖片における入声の持続時間および調値

方言区片	調類	T7				T8			
	地点	持続時間		序列	調値	持続時間		序列	調値
江淮 官話 泰如片	泰州	168	0.86	5/6	<u>54</u>	151	0.77	6/6	5
	東台	128	0.48	6/6	<u>43</u>	281	1.05	3/6	<u>35</u>
	姜堰	168	0.60	5/6	3	146	0.52	6/6	<u>45</u>
	如臯	262	0.91	4/6	<u>44</u>	230	0.79	6/6	<u>35</u>
	南通	106	0.59	7/7	<u>53</u>	110	0.61	6/7	5
呉語 太湖片	金沙	112	0.54	7/7	<u>53</u>	185	0.89	5/7	<u>24</u>
	二甲	250	0.96	5/7	<u>323</u>	193	0.74	7/7	<u>24</u>
	上海	92	0.56	5/5	<u>44</u>	134	0.82	4/5	<u>23</u>
	蘇州	90	0.39	7/7	<u>53</u>	140	0.60	6/7	<u>23</u>
	常州	121	0.64	7/7	5	123	0.66	6/7	3
	杭州	76	0.47	7/7	<u>44</u>	112	0.69	6/7	<u>23</u>
	紹興	89	0.33	8/8	<u>55</u>	127	0.46	7/8	<u>23</u>
寧波	105	0.48	6/6	<u>54</u>	175	0.80	5/6	<u>13</u>	

## 8.2 江淮官話における調値の動き

表 11 は、江淮官話泰如片で入声舒声化が確認されている如東県と興化市における 4 地点の単字調である（朱瑛 2017）<sup>7</sup>。如東では、世代間の比較から、T7 から先に舒声化が始まり、T5 と合流する動き（河口鎮）と、T8 から先に舒声化が始まり、T6 と合流する動き（掘港鎮）が確認できる。一方、興化では、地点間の比較から、T8 は舒声調と合流するだけでなく、同じ入声調である T7 とも合流する動きがあることがわかる。この動きは、同じく江淮官話に分布する洪巢片の影響を受けた結果であるとも言える<sup>8</sup>。洪巢片の入声は、陰陽二類に分かれず、1 つの独立した調類として入声調が存在する。入声陰陽合流の動きは、泰如片では興化の他、泰州、如臯、泰興にもあるが（顧黔 2001）、この動きは、T8 から T7 への合流に限られ、その逆は確認されていない（顧黔 2001:500）。

表 11. 江淮官話泰如片における単字調

地点	年齢層	T1	T2	T3	T5	T6	T7	T8
如東河口	老	42	45	22	44	T1/T5	4	<u>45</u>
	若	42	45	22	44	T1/T5	T5	<u>45</u>
如東掘港	老	22	35	32	45	33	<u>45</u>	3
	若	22	35	32	45	33	<u>45</u>	T6
興化戴南	若	32	35	22	55	T1	<u>55</u>	<u>45</u>
興化沙溝	中	32	35	22	55	T1	<u>55</u>	T7

### 8.3 呉語における調値の動き

呉語における入声舒声化は、主に浙江省南部に分布する南部呉語や安徽省南部に分布する皖南呉語で報告されている。表 12 は、南部呉語地域に位置する金華、義烏、温州（游汝傑・楊劍橋 2001）と皖南呉語地域に位置する湖陽（袁丹 2013）における単字調および平均持続時間である。この 4 地点において、入声調がすでに舒声調と合流しているのは、義烏の T8 のみである。金華と湖陽の T7 は T5 と接近しているが、まだ時間差が生じている。金華では T7 の方が T5 よりも短いのに対し、湖陽では T7 の方が T5 よりも長い。T8 の調値は、金華では、一見 T2 へ接近しているように思えるが、実際は、T8 に属する多くの字音が陽去（T6）と合流している（馮法強 2011:36）。これは、湖陽の T8 の調値が、T6 へ接近していく動きと合致する。

入声舒声化には、「調値舒声化」と「調類舒声化」の 2 つのタイプがある（沈明 2005）。前者は、調値接近によって入声調が舒声調合流へと向かう動きであり、これは方言自らの変化によるもの、つまり自然発生的な現象だと言える。後者は、入声調の合流ルールに従って、調値とは関係なしに舒声調合流へと向かう動きであり、これは官話方言の影響によるものと見なされる（沈明 2005:52）。また「調類舒声化」には、一つの普遍的なルールがある。それは「入声は舒声化すると去声と合流する」（馮法強 2011:51）というものだ。金華の T8 が、調値が近似している T2 へ向かわず、T6 と合流していくのは、まさに「調類舒声化」に基づく動きと考えられる。江淮官話地域の方言が T5 や T6 と合流している動きもこの「調類舒声化」と言える。

しかし、南部呉語には、温州方言のように、入声音節が長音化した後、舒声調への合流には向かわず、入声調のまま独立し続けている方言も分布する。温州では、入声調の持続時間は、単字調の中でも「最長」の位置に並んでいる。これは、「調値舒声化」と「調類舒声化」の両者いずれにも属さないタイプと言える。

表 12. 南部呉語と皖南呉語における単字調および平均持続時間

地点	調類	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
金華	調値	334	313	544	T3/T6	34	14	<u>34</u>	<u>212</u>
	絶対値	310	363	330		251	278	246	255
	相対値	1.07	1.25	1.14		0.86	0.96	0.85	0.88
義烏	調値	334	312	53	443	55	24	423	T4
	絶対値	242	291	290	286	170	232	268	
	相対値	0.95	1.15	1.14	1.12	0.67	0.91	1.05	
温州	調値	33	31	45	34	52	33	323	212
	絶対値	380	318	220	285	208	450	461	500
	相対値	1.04	0.87	0.60	0.78	0.57	1.23	1.26	1.37
湖陽	調値	44	13	33	T3/T6	35	51	35	<u>51</u>
	絶対値	243	280	221		256	209	263	154
	相対値	1.05	1.21	0.95		1.10	0.90	1.13	0.66

まとめ

本稿では、金沙と二甲の両地点における入声舒声化を比較しながら、通州方言における入声調の動きを分析した。その結果、入声舒声化は、入声音節の長音化に始まり、舒声調値への接近を経て、調類合流へ向かうというプロセスが確認できた。しかし、長音化が加速する調類やその進捗には地域差が生じている。金沙では T8、二甲では T7 に長音化が加速する動きが見られ、二甲の T7 が最も舒声化が進んでいることが確認できた。また、入声舒声化は、江淮官話や南部呉語においては広く見られる現象であるが、通州近隣の北部呉語には、入声舒声化が確認されていないことから、通州方言の入声舒声化は、官話方言の影響を受けて発生していることも明らかとなった。

入声舒声化には2つのタイプがあり、その発生原理は大きく「調値法則」と「調類法則」に分類できる。金沙と二甲の T7 が、調値の地域差に関わらず、どちらも陰去 (T5) へ接近しているという動きは、「調類法則」に基づく結果と分析できる。また、二甲の T7 の舒声化が、金沙よりも加速しているのは、T5 の調値が長音化を促しやすい下降上昇型 [323] であることに起因する。この現象は、温州方言の T7 が、まさに二甲と同じく下降上昇型 [323] であることとの関連性に注目すべきである。温州方言では入声調の持続時間が、単字調の中で「最長」の位置に並んでいる。これに対して、二甲では、T7 の調値が T5 と近似していたことに加え、入声調は去声と合流するという普遍的なルールに



従う方も働いて、急激に舒声化が進んだのであろう。つまり、二甲の T7 の舒声化は、「調値法則」と「調類法則」双方の影響を受けた結果、舒声化が加速していると考えられる。金沙の T8 が、T7 よりも長音化が加速しているのにも関わらず、調値接近の動きが鈍いのは、「調類法則」による力、つまり官話方言の影響が及んでいないためであると分析できる。

### 注

- 1 例えば、雲南、貴州、四川の西南官話地域（張振興 1997）や山東省膠遼官話地域（錢曾怡 2002）には、入声調が舒声調と合流せず独立した調類として存在する方言が分布している。
- 2 「鎮」は概ね日本でいう「町」に相当する行政区画である。旧金沙鎮は、2015 年に金新街道と金沙街道に改編された。面積と人口の統計値は、金新街道のデータを採用した。
- 3 発話者の選抜基準は、地元出身者を第一条件とし、年齢や性別による違いも分析できるように、異なる年齢層から、男女 1 ペアずつを選定した。若年層に至っては、言語形成期において、他地域で生活した経験を有さないことを条件にした。表 1 の両親の出身地に、金沙と二甲以外の地名が含まれるが、山東と上海を除いてすべて通州近郊の町である。
- 4 比較対象に、老年層では最年長者のデータを採用したが、若年層では他地域での生活歴を鑑み、金沙では「金沙 5」のデータを採用した。
- 5 『南通市誌』1996、『江蘇省誌』1998、鮑明煒・王鈞 2002、顧黔等 2006、汪平 2010、蔡華祥・万久富 2010、張璐 2011、瞿晗擘 2013、万久富 2016、朱瑛 2017 の調査結果に基づく。
- 6 江淮官話の言語データは劉俐李 2007、呉語の言語データは游汝傑・楊劍橋 2001 に基づく。劉俐李 2007 のデータは男女別に記されているが、表 10 では男性の発話データのみを採用した。
- 7 表 11 のデータは、戴南を除いてすべて男性の発話データを採用した。また朱瑛 2017 では、短平調を [30] のように表記しているが、本稿では、中国語方言学で一般的な表記に従い [3] とした。また如東河口方言の T6 は、T1 に合流しているものと T5 へ合流しているものとに分かれるため、T1/T5 のように表記した。次表も同様である。
- 8 江淮官話では、入声音節と入声調の違いに基づき、黄孝片・洪巢片・泰如片の 3 つの方言グループに区分される（『中国言語地図集（第二版）』）。黄孝片の入声音節は長音

化しており、入声調は1つの調類として存在する。洪巢片の入声音節は短促調で、入声調は1つの調類として存在する。泰如片の入声音節は短促調で、入声調は陰陽二類に分かれている。

追記：本研究は、独立行政法人日本学術振興会の科研費（18K00596）の助成を得たものである。

### 参考文献

- 鲍明炜（主编）1998《江苏省志·方言志》，南京大学出版社。
- 鲍明炜 王钧（主编）2002《南通地区方言研究》，江苏教育出版社。
- Boersma, Paul and David Weenink 1992-2018 Praat: doing phonetics by computer [Computer program] Version5.2.03 (19 November 2010) from <<http://www.praat.org/>>.
- 蔡华祥·万久富 2010《江苏南通金沙方言同音字汇》，《现代语文》第11期。
- 曹志耘 2002《吴徽语入声演变的方式》，《中国语文》第5期。
- 曹志耘（主编）2008《汉语方言地图集（语音卷）》，商务印出版社。
- 大西博子 2018「二甲方言の単字調における音響音声学的分析」，近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）第9巻第1号。
- 大西博子《南通金沙方言単字調中の入声》近刊。
- 冯法强 2011《中古入声在方言中的舒化研究》，上海师范大学硕士论文。
- 傅国通·蔡勇飞·鲍士杰·方松熹·傅佐之·郑张尚芳 1986《吴语的分区（稿）》，《方言》第1期。
- 顾黔 2001《通泰方言音韵研究》，南京大学出版社。
- 顾黔·Richard VanNess Simmons·石汝杰 2006《江淮官话与吴语边界的方言地理学研究》，上海教育出版社。
- 刘俐李 2007《江淮方言声调实验研究和折度分析》，巴蜀出版社。
- 卢今元 2003《通东话、金沙话与南通话的比较》，《吴语研究（第二届国际吴方言学术研讨会论文集）》，上海教育出版社。
- 钱曾怡（主编）2001《山东方言研究》，齐鲁书社。
- 瞿哈晔 2013《金沙方言语音研究》，南京大学硕士论文。
- 陶国良 2003《通州方言概况和金沙话》，《吴语研究（第二届国际吴方言学术研讨会论文集）》，上海教育出版社。
- 唐志强 2018《扬州方言入声区别性特征的感知研究》，《方言》第4期。

- 通州市地方志编纂委员会 1996《南通县志》，江苏人民出版社。
- 通州年鉴 2017 <http://sz.tongzhou.gov.cn/nj2017/main.html>。
- 沈明 2005《晋东南晋语入声调的演变》，《语文研究》第4期。
- 宋益丹 2009《南京方言中的入声喉塞尾实验研究》，《南京师范大学文学院学报》第2期。
- 万久富 2016《第五章 通州》，《江苏语言资源资料汇编：第六册 南通卷》，凤凰出版社。
- 汪平 2005《北部吴语三小片的重新画分》，《方言》第2期。
- 汪平 2010《江苏通州方言音系探讨》，《方言》第3期。
- 徐铁生 2003《通东方言与金沙方言归属刍议——兼论两种方言的形成及其与南通方言的关系》，《吴语研究（第二届国际吴方言学术研讨会论文集）》，上海教育出版社。
- Xu, Yi 2005-2018 ProsodyPro.praat. Praatscript. Version4.3 (15August2012) from <<http://www.homepages.ucl.ac.uk/~uclyyix/ProsodyPro/>>.
- 徐越·朱晓农 2011《喉塞尾入声是怎么舒化的——孝丰个案研究》，《中国语文》第3期。
- 许宝华·汤珍珠·游汝杰 1984《北片吴语的异同》，《方言》第4期。
- 颜逸明·敖小平 1984《吴语的边界和分区（二）南通金沙方言的归类》，《方言》第2期。
- 游汝杰·杨剑桥（主编）2001《吴语声调的实验研究》，复旦大学出版社。
- 袁丹 2013《基于实验分析的吴语语音变异研究》，复旦大学博士论文。
- 袁丹 2018《从感知线索看吴语典型入声韵 [vʔ] 中喉塞尾的性质》，《吴语研究（第九届国际吴方言学术研讨会论文集）》，上海教育出版社。
- 张璐 2011《南通话音韵研究》，苏州大学硕士论文。
- 张振兴 1997《重读〈中国语言地图集〉》，《方言》第4期。
- 周骞剑 2009《金沙方言的归类》，《消费导刊》第3期。
- 朱晓农·焦磊·严至诚·洪英 2008《入声演化三途》，《中国语文》第4期。
- 朱晓农 2010《语音学》，商务印书馆。
- 朱晓农·焦磊 2011《短调无塞音——报告一例特殊的入声类型》，《语言研究集刊（第八辑）》，上海辞书出版社。
- 朱瑛 2017《江苏境内江淮官话声调实验研究》，南京师范大学硕士论文。
- 中国社会科学院语言研究所 2012《中国语言地图集（第二版）汉语方言卷》，商务印书馆。